

平成 21 年 6 月 26 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18730263
 研究課題名（和文） 経営学的経営哲学構想のための基礎研究
 「科学としての経営学」の底流と課題
 研究課題名（英文） A fundamental study for designs related to philosophy of management :
 An Undercurrent and problem of Intelligent Management Theory
 研究代表者
 藤沼 司 (FUJINUMA TSUKASA)
 青森公立大学・経営経済学部・准教授
 研究者番号：30387865

研究成果の概要：

本研究では、これまでの経営学研究の歴史展開過程を、特に主要な学説に焦点をあてて、その学説の哲学的・方法的基盤にまでさかのぼって批判的に考察した。その過程で確認したことは、以下の3つである。

第1に、経営学史には、「科学としての経営学」を指向する主潮流（知識経営論の系譜）と、それに加え、むしろ経営哲学研究の重要性を強調する系譜があること、第2に、現代文明が抱える自然環境問題、文化多元性の問題、人間性の問題といった諸課題の生成に「科学としての経営学」（＝知識経営論の系譜）が重要な役割を果たしてきたこと、そして第3に、現代文明の諸課題を克服するために、改めて経営哲学の構想・体系化が要請されること、である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	150,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経営学・経営学

キーワード：経営学史、経営哲学、知識経営論、テイラー、フォレット、メイヨー、バーナード、サイモン

1. 研究開始当初の背景

経営学の史的展開過程をF.W.テイラー以来「経験から科学へ」（＝科学としての経営学）の延長線上において三戸公（『管理とは何か』文眞堂、2002年）は捉える。小笠原英司（『経営哲学研究序説』文眞堂、2004年）も、経営学

体系を経営科学（＝科学としての経営学）と経営哲学の両輪とした上で、従来経営学が経営科学に傾斜してきたと指摘する。その上で両氏は、経営学研究の経営科学への傾斜的展開の問題性を指摘し、経営哲学構築の必要性を強調する。また野中郁次郎（その他2名編著『知

識経営実践論』白桃書房、2001年や他1名共著『知識創造の方法論』東洋経済新報社、2003年)も従来の経営学・組織論研究が知偏重であり、今後の課題として「組織の真・善・美」研究の必要性を述べている。組織学会も同様の主張を展開する(「特集・組織における美と倫理」『組織科学』白桃書房、Vol.33, No.3, 2000年)。こうした研究動向をさらに文明論的に展開しようとするのが村田晴夫(「組織における美と倫理」『組織科学』白桃書房、Vol.33, No.3, 4-13頁、2000年や「意味の文明論的階層性と現代文明」『武蔵大学論集』第48巻第2号、121-138頁、2000年)である。本研究はこの線に沿う。

本研究は、経営学体系の一翼を担うべき経営哲学の構想・体系化に向けた基礎研究である。経営哲学研究を具体的に展開するアプローチとして、小笠原はそのツールから、文化アプローチ、哲学説アプローチ、経営者哲学アプローチ、経営学説アプローチ、の4つに大別する(小笠原〔2004〕46-47頁)。そこで本研究は、経営学説アプローチから「経営哲学とは何か」という問いに接近する着想を得た。

2. 研究の目的

研究の全体構想は、21世紀に求められる「開かれた経営学」の構築であり、そのためにこれまでの経営学の史的展開過程を方法的・文明論的に再検討することであった。

こうした問題意識は、経営学は理論と実践との統合にその学問的特徴があり、現代文明の形成に経営学が重要な役割を果たしたのではないか、という仮説に基づく。人間社会を含めた生命圏の持続可能性の確保を前提するとき、現代文明はこれまでの方向性を問い直し、その転換を迫られている、と言える。こうした時代の要請に応えるために、「現代文明の転

換期における経営学の役割」という問題を、研究代表者は意識する。ただし、ここでいう「現代文明の転換期における経営学の役割」には、ふたつの含意がある。第1の含意は「現代文明の形成に際して経営学が果たしてきた役割」であり、第2の含意は「新たな文明の形成に向けて経営学が果たしうる役割」、である。

そこで本研究の目的は、主として第1の含意に集中し、「現代文明の形成に際して経営学が果たしてきた役割」を問い、そこに潜む問題性を明らかにし、第2の含意である「新たな文明の形成に向けて今後経営学が果たしうる役割」へと接続するための解決の方途を探ることにある。

3. 研究の方法

本研究の学術的な特色・独創的な点は、およそ100年の歴史を有する経営学の史的展開過程を、知識論を視軸として概観し、さらにはそこで得られる知見を「真・善・美」の枠組みによって解釈・再構成する点にある。そのために本研究は、哲学的・方法的な研究と経営学説史研究という2つの接近方法を組み合わせることとなる。

そこで第1に、本研究の分析枠組みとなる「真・善・美」の相関についての哲学的・方法的な考察が必要となる。その際、プラグマティズムやA.N.ホワイトヘッドを手がかりとする。プラグマティズムを手がかりとする理由は、主として3つある。第1の理由は、後述するようにG.E.メイヨーが「知識経営」を文明論的視角から批判する際に、プラグマティズムの代表格であるW.ジェームズに由来する「具体的知識」および「抽象的知識」という2つの知識概念を援用しているからである。ジェームズのこの知識類型は、こんにち流通している「暗黙知」および「形式知」の2類型を先取りしている。第2の理由は、アメリカ経

営学の哲学的・思想的基盤には、プラグマティズムがあるといわれているからである。第3の理由は、プラグマティズムは、真・善・美を分離することができず、相互に密接不可分なものと考えているからである。またホワイトヘッドを手がかりとする理由は主として2つある。第1の理由は、「有機体の哲学」とも呼ばれるホワイトヘッドの哲学に経営学の新たな方法論を提供するものと期待が集まるからである。こんにち組織体を一個の有機体として取り扱うことが常識化してきているが、その哲学的・方法論的基盤となりうるからである。第2の理由は、Whitehead が人類の歴史を「文明化の過程」として捉え、文明化された社会を 真理、美、芸術、冒険、平安の5つの特性で捉えるからである。ホワイトヘッドの哲学に、経営学を文明論的に把握するための基本的な枠組みを提供するものと期待が集まるからである。

第2に本研究は、経営学説史研究を必要とする。本研究は、現代文明が抱える基本的諸問題を経営学がどのような形で引き受けるのかという問題意識から出発し、アメリカ経営学の主要学説の系譜を辿ることによって、むしろその経営学の発展史の中に現代文明の問題性を促進する一面が内包されていたことを指摘する。また他方ではその経営学史の中に現代経営学の「文明論的課題」(地球環境問題、文化多元性の問題、人間性の問題)に超克的に応答する可能性を見出そうとする学史的な研究である。

4. 研究成果

本研究から、(アメリカ)経営学史を通観して得られる経営学の志向性は、経営実践への適用を意図する「組織知」の創造ということにあり、その出発点に位置するのが F.W. テイラーの科学的な管理であった。本研究では、

テイラー・システムという科学的な管理の方策論の基礎にあるテイラーの経営思想(テイラーリズム)に焦点を絞り、それが「対立から協調へ」と「経験から科学へ」という2側面からなるものであったにもかかわらず、後者の「経験から科学へ」の側面のみが科学的な管理の本質と見なされ、その後の経営学の科学化志向が方向づけられたことを見出した。

次に「人間関係論」の先駆者とも「近代的管理論」の始祖とも評される M.P. フォレットの経営思想を考察し、フォレットが一方ではテイラーの科学的な管理を積極的に評価しつつ、他方では科学的な管理化が進展する状況が孕む問題性を克服するために「科学的な管理の哲学」の必要性を同時に主張した点に注目する。しかしながら、フォレット以後の経営学の史的展開過程は、彼女の期待とは裏腹に、「管理全般の科学化」のさらなる徹底化の一途を辿った。そうした近代経営のありようを「知識経営 intelligent management」と特徴づけ、これを文明論的視角から批判した人物が G.E. メイヨーであった。

本研究では、メイヨーが「知識経営」に見出した問題性を、その思想基盤をなす W. ジェイムズの知識論に遡って再構成し、これを人間協働(=組織体)に潜在する多様な意味(自然的、社会的および個人的意味)の<組織の意味>への一元化と、組織体の活動の日常生活からの乖離、と捉える。こうした事態を本研究は「知識経営の問題性」と呼び、「知識経営」化の進展が組織目的の実現を所与化することによって人間協働を「閉じられた」ものとしたのではないかという仮説を提示して、現代経営学の可能性を批判的に問題とする<問いの原型>としている。

「知識経営の問題性」は<世界>をどのように認知するかという問題と深く関わる。その後の経営学の主流を決定づけた H.A. サイ

モンの組織・管理論はメイヨーが文明論的に批判した「知識経営の問題性」を克服するよりも、むしろ経営学の理論科学的精緻化をめざし、結果として<世界>を構成する多様な意味を<組織の意味>へと一元化し、その優越を促して組織的価値を社会的価値から乖離させる単純化を、つまり「閉じられた人間協働」化の危険性をより深刻化させたと見なすことができる。研究代表者はここに現代経営学のひとつの帰結を見出し、経営学の底流には「知識経営の問題性」が伏在していると把握している。知識経営化が進展しつつあった第2次世界大戦後、自然環境破壊(公害問題)や企業の社会的責任論、消費者保護運動、労働の人間化要求といった問題群が注目を集めるようになるが、その底流に知識経営の問題性が伏在していたと見ることができる。ここに現代経営学を問うための「問いの原型」が見出される。つまり、人間協働における「寛容 tolerance」の問題が経営学の基本問題として導き出されてくる。言い換えれば、いかにして人間協働に潜在する<組織の意味>と<自然の意味>、<社会の意味>、そして<個人の意味>との間の調和を実現させるか、という問題である。

研究代表者は、環境問題、文化多元性の問題、人間性の問題といった現代経営学の文明論的諸課題に通底する問題性として、「組織の意味の優越」という不寛容の問題(=「閉じられた経営学」)が、現代経営学の、さらには100年に亘る経営学の基調に孕まれていると考える。

そこで本研究は、経営学において寛容論の端緒を拓いたC.I.バーナードの理論に着目する。バーナード理論の検討を通じて、人間協働の中核をなす組織とは何か、人間にとって組織とは何かを原理的に検討し、さらにバーナード理論の哲学的基盤にA.N.ホワイト

ヘッドの「有機体の哲学」があることを確認する。バーナード理論においては、人間協働には多様な意味・価値が潜在しており、協働の存続過程で深刻な諸価値の対立が起こりうること、そうした対立を克服しうるときに協働のさらなる発展があり得ること、そしてそうした諸価値の対立を克服するために経営者には「新たな価値の創造」が期待されることが理論的・体系的に説かれている。本研究では、こうしたバーナード理論を分析枠組みとしつつ、組織現象のさらなる真理の探究に偏重する「知識経営の問題性」に対する批判的検討を行い、その克服の方途を探った。

その成果として、こうした「閉じられた経営学」は、「科学としての経営学」の追求に起源を有すると研究代表者は考える。「科学としての経営学」は、経営(組織)現象を説明する科学的知を集成し、それを<組織の意味>の実現のために適用・応用することを想定してきた。こうした科学的な組織知の追求(追究)を、換言すれば、従来の経営学研究を経営(組織)現象の真理の追究であったと把握できる。科学的知は単に価値中立的であるのではなく、むしろ価値問題に言及しないという形で特定の価値を無批判的あるいは無自覚的に受容する。経営学の場合それは、組織目的の合理的な達成(組織の有効性)の所与視・自明視である。

その意味を解釈するために、「真・善・美」の枠組みを採用する。本来的に「真・善・美」は調和を必要とする。ところが経営学における「真への傾倒」は、それに引きずられる形での「組織の善」(組織の行動準則)や「組織の美」(組織体の存在様式や事業経営のあり方など)の変容をもたらしたのではないか。すなわち、組織固有の道德準則=組織準則が諸他の準則(自然的、社会的および個人的準則)に優越し、組織目的の効率的な追求という組織の機

能美を優先させるあまりに、諸他の価値との「調和の破れ」をもたらしたと言えまいか。それがこんにち、生命圏や諸社会、諸個人と組織体との調和の破れ、企業の社会的責任やビジネス・エシックスなどの問題として顕在化してきているのではないか。ここから翻って、「開かれた経営学」構築のため、いかにして「組織体における真・善・美の調和」を実現させるかという問いが出てくる。

本研究では、経営学の歴史的展開を鳥瞰する中で、テイラー=サイモンの「経営科学」の系譜とフォレット=バーナードの「経営科学+経営哲学」の系譜を対置し、経営学の主流は依然として前者にあるとしながらも、本研究ではむしろ後者にこそ現代経営学の文明論的諸課題に応答する可能性があることを確認した。それは後者の系譜が、経営科学が排除・軽視した価値問題を積極的に取り込んでいるからであり、さらに経営学体系の両輪を成す経営科学と経営哲学とをその理論体系に内包していると理解できるからである。本研究はこうした「新たな真・善・美の調和の創造」を主題化するフォレット=バーナードの系譜に、現代経営学が抱える文明論的諸課題を克服する方途を見出し、今後のさらなる研究の継続を計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- 1、藤沼 司、「バーナード創造的管理論の現代的意義 「文明の転換期における経営学の役割」を問うために」、『青森公立大学経営経済学研究』、査読無、第14巻第2号、pp.61-70、2009年3月。
- 2、藤沼 司、「サイモン理論の経営学史上の位置 近代経営学のひとつの帰結」、『愛産大経営論叢』、査読無、第10号、pp.11-27、2007年12月。

- 3、藤沼 司、「フォレット経営思想の現代的意義 「組織社会」におけるプロフェッションと管理の意味」、『愛産大経営論叢』、査読無、第9号、pp.29-44、2006年12月。

[学会発表](計3件)

- 1、Tsukasa FUJINUMA, Education for Environmental Management, 7th International Whitehead Conference January 5-9, 2009, Dharmaram College, Bangalore-560 029, India, 2009/01/07.
- 2、藤沼 司、「サイモンと経営哲学」、経営哲学学会第25回大会自由論題(慶應義塾大学)、2008年9月8日。
- 3、藤沼 司、「フォレット経営思想の現代的意義 「組織社会」における管理の意味」、『日本経営教育学会第54回大会自由論題(流通科学大学)』、2006年10月29日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤沼 司(FUJINUMA Tsukasa)

青森公立大学・経営経済学部・准教授

研究者番号：30387865